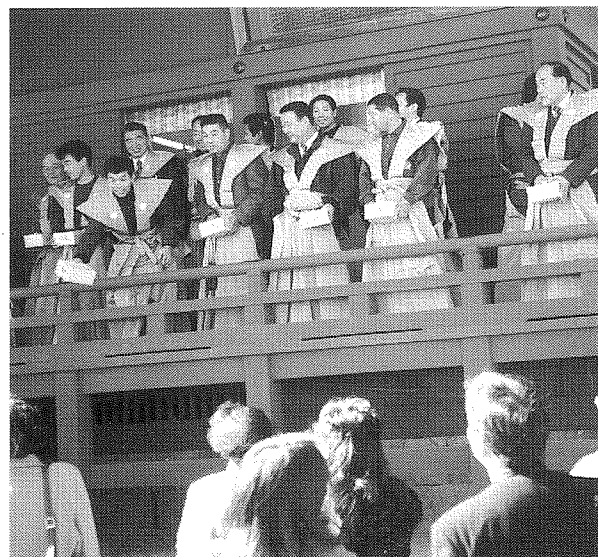


平成十戊寅年節分祭は、三百三十六人の年男の申し込みを受け、好天にも恵まれて、午前十一時・正午・午後一時の三回に亘り、厳粛の中にも盛大に祭典ならびに豆撒きの行事を恙なく行う事が出来ました。

「馬場雅子嬢」ほかの和服姿も艶やかに、来るべき春を前に豆を撒いて、邪気(鬼)を追い払い、幸招きを祈ぎ奉りました。

平成十年の新春を迎えて来、節分に至る一か月の間、日本国内の政治、経済、教育の場における有様は、いまだ申す言葉もありませんが、高級官僚による増収増税事件、これを基とする大蔵大臣の辞任、中学生による校内暴力の頻発は、ついに学校内での先生の刺殺事件にまで及び、また青少年にかかわる覚醒剤乱用事件の多発と、全く何とも形容出来ない情けない事態の連続でありまして、日本の国が終焉を迎えるのではないかとさえ危惧させられる事件が毎日のように繰り返されております。

戦後五十数年を経た現在、戦後の教育によって育った人達が、殆ど国家の中枢を握り、政治、経済、教育の各般に亘ってその力を発揮されておるところではありますが、何か戦後教育の弊害が一旦に吹き出した感があると申しても過言ではないと思えます。申すまでもなく、すでに神道関係を始めとする幾多の先賢が諸々その問題点を指摘し、問題の提起をされてこられたところでありますが、やはり、家庭、学校、職場それぞれの場における人づくりの大切さ、唯単なる成績主義による



人間形成ではなく、真の日本人としての誇りを持たせる敬神崇祖の念を基とする人間本来の教育が今こそ叫ばなければならないと確信するものであります。誤った歴史観を拭い去り、日本民族の歴史伝統を正しく、子孫に伝えることが精神復興の原点に立つものであると思えます。

数十年来と言われた御嶽連山の積雪も節分立春を過ぎた陽光の下、少しずつ少しずつ融けだして山野を潤し始めております。自然の恵みのありがたさをしみじみと感じ取れる季節となりました。

あたかもこの稿を記しております今日二月七日は、長野冬季オリンピックの開会式の日であります。世界七十二カ国、二、三三九人の参加の下に十六日間に亘り、冬のドラマが展開されることとなります。

世界の国々の代表選手が素晴らしい技を競う中で、日本の国を覆っている暗雲を吹き飛ばして貰いたいと願うのは、私だけではないと思えます。

前号でお知らせをいたし、また諸々お願いを申し上げておりました御本殿の屋根銅板葺替工事及び端垣改築工事ならびに都指定有形文化財「常磐堅磐社」の漆塗替え工事につきましては、多くの方々からご浄財のご寄進をいただく中で、昨春秋、無事竣工を見ておりますことをご報告を申し上げます。御礼とさせていただきます。

第二十五回

武蔵御嶽神社新年奉納俳句入選作品集

奉納式 平成十年二月十一日

選者 来住野 臥丘

特選 一席 山翡翠の姿隠れし瀧つらら	青 梅 榎 戸 由 造
二席 冬桜おとひと声残し行く	昭 島 田 中 雪 枝
三席 白手袋嵌めるときめき初乗務	青 梅 原 島 康 典
四席 にんげんに憐れまるとも冬蔵	福 生 野 村 春 子
五席 呼び止めるように句碑の辺笛鳴す	福 生 田 光 絹 代
一席 参道の裸電球年明くる	福 生 浄 法 寺 朋 実
二席 初詣誰にも声を掛けたくて	世 田 谷 森 岡 水 居 郎
三席 天平を経し瘤持ちて大櫓	日 の 出 杉 山 水 居 泉
四席 声投げて初山彦を誘い出す	入 間 増 岡 蛭 雪
五席 ケーブルの年の始めの発車ベル	瑞 穂 長 澤 民 之 助
六席 いろも香もまだ新しき朴落葉	青 梅 佐 久 間 玄 寿
七席 初買いのケーブル切符印刷匂う	八 王 子 島 田 み つ お
八席 読初は社の由来土産茶屋	青 梅 諸 井 末 男
九席 初春の色香みやげの黍大福	福 生 木 村 ヒ サ 子
十席 供物に御岳鴉の初喧嘩	青 梅 持 田 佐 智 子
四半世紀神へ献句の春うらら	選 者

平成十年奉納俳句選評

奉納俳句も今年で二十五回を数えた。二十五回といえはまる二十四年、オギャーと生まれた赤子が結婚し子供もでき一家族を成す歳月でもある。この長い歳月もあり長いと感じなかつた事は楽しい歳月だったと言える事もある。年の始めに神詣でをし敬神の念を深め、又多くの友を得更に御岳山頂に於ける自然・生活・神事等に接することの出来たのは奉納俳句の長い継続の賜であり、人生に新しい一頁が挿入されたとも言えるであろう。挿入された思い出を語ると尽きないので選評に入ることとする。

特選一席(山翡翠の姿隠れし瀧つらら)この山翡翠は奉納句に始めて出た鳥である。瀧水柱の瀧は七代の瀧と思つた。其処には瀧の其処此処に四五センチとも見える瀧水柱が輝くように垂れている。「裏見の瀧」などの名があるように、この水柱の裏も空洞になっており、山翡翠はその空洞に隠れたのであろう。(姿隠れて)の表現は固いが、大切な物を見た緊張感のようなものが見えて頼ましい。特選二席(冬桜おとひと声残し行く)俳句は独り歩きをすると言われるがこの作品も二様の意図が読みとれる。「おお」と言って立ち止まり讀める人、立ち止りも見ることもなく「おお」と声だけ残して行く人。作者は恐らく後者を詠んだものと思う(声残し行く)に自然に対する関心の無さに不満の感じが伺える。

特選三席(白手袋嵌めるときめき初乗務)御岳ケーブルカーの運転手さんであろう。初詣客を満載した初乗務。新品の白手袋を嵌めるときめき、普段に増した緊張のときめきに感動と好感が持てる。

特選四席(にんげんに憐れまるとも冬蔵)冬蔵は初蔵でも早蔵でもなく、冬の日当りのよい山野に出る春の物にくらべて小振りの物である。人間が「寒いだろう寒さなあ」などと憐れみに似た声をかけて呉れるが、私はこの寒さの中を生き抜く力をもっている人だと冬蔵を擬人化して詠み作者自身を鼓舞した作とも見られる。

特選五席(呼び止めるように句碑の辺笛鳴す)句碑を詠んだ物は毎年見えるがこの作には親しさが出ていてよかつた。

秀逸の作に一言触れておくと、裸電球・黍大福・初喧嘩等々発見・感動・手垢の取れた語句を使い今まで詠まなかつた対象に努めて立ち向かう意欲が見えてよかつた。佳作も同じ。